

日本旧石器学会
ニュースレター 第24号
NEWS LETTER No.24
JAPANESE PALAEOLITHIC RESEARCH ASSOCIATION



日本旧石器学会第11回大会の開催報告

2013年6月15日・16日、東海大学湘南キャンパスを会場として、日本旧石器学会第11回大会が開催され、総会・一般研究発表・シンポジウムならびにポスターセッションがおこなわれた。

総会 11号館11-206教室を会場として、6月15日の13時から日本旧石器学会総会がおこなわれた。冒頭、当会小野昭会長の挨拶があり、その後、事務局より現会員数が241名で、65通の委任状と当日出席43名であること、その合計が会員数の5分の1以上に達することから、総会は成立することが報告された。そして、事務局推薦により芹澤清八氏が議長に選出された。

議事は、各委員会より2012年度活動報告と2013年度活動計画の報告がおこなわれ、採決により承認を得た。その他の報告・審議として、日本旧石器学会賞規定の制定、選挙管理委員会の選出、2013年度役員と職務分担、事務所の移転に伴う会則の一部変更については本ニュースレター2～9頁に掲載している。

一般研究発表 15時20分から一般研究発表がおこなわれた。発表に先立ち、今回、口頭発表が予定されていたものの、ベトナムで急逝された西村昌也氏のご冥福を祈り、出席者全員で黙祷をささげた。その後、山崎真治氏他、西秋良宏氏他、杉山浩平氏他、橋詰潤氏他、野口淳氏他、藤田尚氏からの発表がおこなわれた。対象となっている地域や取り扱われている論題は様々である。各報告の題目・内容については、当日刊行された予稿集を参照されたい。

シンポジウム シンポジウム『旧石器時代の年代と広域編年対比』は、6月15・16日の両日にわたって実施された。15日は、基調講演として工藤雄一郎氏「旧石器時代の年代と広域編年対比」がおこなわれた。古環境の変遷に関する情報と考古資料から導き出される先史人類の適応に関する情報とを総合的に検討するためには、時間的対比のツールとして放射性炭素年代測定が有効であることが示され、その後期更新世にかかわる

年代較正はどのようにアップデートされてきたのか、研究の経過と現状が整理された。

16日には、冒頭に当会研究企画委員会の諏訪間順委員長からシンポジウムの趣旨説明があった。今回のシンポジウムでは、まず日本列島各地の考古遺物の編年とともに、放射性炭素年代測定値にもとづいて広域的な対比を試み、各地における最古の石器群、局部磨製石斧・ナイフ形石器・細石刃などの出現と変遷、土器の出現などのトピックについて年代の観点から検討をおこなうこと、加えて年代測定値が不足している時期や地域に関する問題意識を共有することが目的であると説明された。続いて計5本の基調報告があった。発表者と題目は以下の通りである。吉川耕太郎・直江康雄氏「北海道・東北」、中村雄紀氏「関東」、阿部敬氏「中部」、三好元樹氏「近畿・中四国」、鎌田洋昭氏「九州」。

各報告の後に、諏訪間委員長の司会のもとでパネル・ディスカッションがおこなわれた。まず、諏訪間委員長より提示された各トピックの年代について、各地域の報告者が現状での把握を回答された。それをもとに、会場から多方面にわたる質問やコメントがなされ、報告者側からのリコメントも示された。放射性炭素年代測定値に関しては、遺跡での石器の年代を把握するという目的だけにとどまらず、環境データと考古資料と



写真1 パネル・ディスカッションの様子



写真2 ポスターセッションの様子

の年代的対応関係をおさえるという意義があることから、今後も積極的に測定・蓄積を進めていくべきであること、また測定値の集成作業を適時おこない、測定値が欠落している地域や時期を明確化させていく必要があること、それにもとづいて調査機関に収蔵されている未測定試料の年代測定も積極的に進めていくべきであろうこと、などが会場側からコメントとして指摘された。最後に、小野会長からは、今回のシンポジウムで日本列島全国の研究者が一同に会し、年代対比に関する問題点を議論することができたのは大きな成果であり、このような機会を設けることが全国学会としての日本旧石器学会の果たすべき役割であろうことが述べられ、閉会となった。

なお、諏訪間委員長からは、本シンポジウムにもとづいた特集が、会誌『旧石器研究』で組まれる予定であることが、パネル・ディスカッションの冒頭で説明された。パネル・ディスカッションの内容についても、その特集に掲載される予定とのことである。会場での詳しい議論の内容については、来年度刊行される予定の会誌10号を参照されたい。

ポスターセッション 11号館11-206教室前フロアで、15・16日にポスターセッションがおこなわれた。計7本の発表があった。今回、発表された方々は、橋詰潤氏、堤隆氏他、杉原保幸氏他、村崎孝宏氏他、門脇誠二氏、池谷信之氏他、中沢祐一氏他である。

ポスターセッションのコアタイムは、16日12時から13時30分までと設定され、この間、各ポスターの前では報告者と参加者との間でさかんな質疑応答がなされていた。報告件数の増加にみるように、当学会大会でのポスターセッションによる研究成果の発表は、当学会会員の間で定着してきたようである。今回発表された各研究の成果については、当日の議論も参照したうえで、学会誌『旧石器研究』へ論文として投稿されることを各報告者には期待したい。

なお、15日の夜には、東海大学の学生食堂を会場として懇親会も開催された。昼間のシンポジウムに参加された多くの方々が懇親会にも出席され、懇親会会場は大変なにぎわいを見せていた。

日本旧石器学会第11回大会は、東海大学考古学研究室の皆様のご協力を全面的にいただき、成功裡に終わることができた。松本建速先生をはじめとする同研究室の皆様には、会場運営やその準備に細やかな心配りを賜った。末筆ながら、この場を借りて御礼申し上げたい。
(記録：ニュースレター委員高倉記)

2012年度委員会報告

総務委員会 2012年度の総務委員会の活動は以下の通りである。

(1) 会員情報の管理

(2) 2012年度総会に関する資料の作成・会場設営・連絡調整(総会：2012年6月23日(土) 国立文化財機構奈良文化財研究所平城宮資料館講堂他)

(3) 役員会に関する資料の作成・会場設営・連絡調整(役員会：2012年5月26日(土) 立正大学大崎キャンパス3号館334号教室)

(4) 会務に関する連絡・調整、各委員会間の連絡・調整

(5) 会誌(「旧石器研究」第8号)、ニュースレター(第21・22・23号)、各種学会連絡文書の発送

・会誌発送：2012年7月11日(水)

それ以外に適宜要望に応じて発送を行なった。

(6) 日本考古学協会総会図書交換会等におけるシンポジウム予稿集及び会誌「旧石器研究」の頒布

・図書交換会：2012年5月27日(日)

(7) 新入会員の入会・住所変更等に関する事務

・2012年度の新入会員は7名、退会者は14名であり、2013年4月1日現在の会員数は、238名である。

(8) 2013年度総会会場となる東海大学文学部考古学研究室との調整(研究企画委員会連携)

(9) 研究グループ支援制度に関する事務

・「沖縄更新世人類研究グループ」(研究代表者 山崎真治氏)の第2年度の支援

・「南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ」(研究代表者 野口淳氏)の採択及び第1年度の支援

(10) その他

ア 学会10周年事業に関して、学会賞の制定について検討した。

イ 会員メーリングリストについて検討した。

会計委員会 2012年度の会計委員会の活動は、以下の通りである。

[総会・役員会時] 会議費、旅費交通費、諸謝金等の各種支払。各委員会の立替金の清算。会費の徴収。刊行物の頒布(総務委員会と協同)。現金収入(会費・刊行物頒布収入)の学会口座への預入。

[通年] 会費収入および刊行物頒布収入の管理。会員ごとの会費納入状況の管理。会費納入・住所変更等諸連絡の総務委員会への連絡。学会口座出納の管理。会誌8号、シンポジウム予稿集、ニュースレター(20・21・22号)の印刷費支払。研究グループへの運営助成金送金。公開講演会のチラシ印刷費・講師謝金等支払。

・2012年度決算(資料1参照)

[会費収入] 2012年度内の会費の納入状況は、のべ218件(／会員数247人)である。

[その他の収入(刊行物頒布収入)] 刊行物は、バックナンバーを含め、総会時頒布や委託販売により、予算額の7～8割の収入がある。

[支出] 各費目とも、会議費・会場設営費以外は概ね予算額の範囲内で執行できている。

[特別会計報告] 2012年度より次回APA(アジア旧石器協会)日本大会経費の積立を開始した。(資料2参照)

[会計監査] 2013年6月2日に、熊本県錦町において、会計監査委員より会計監査を受け、会計が適正に執行されている旨の報告を受けた。(別紙資料省略)

会誌委員会 2012年度は新たな体制で活動を行った。

2012年度における会誌委員会の目標は、(1)学術的水準の高い論考が並ぶ、より「面白い」誌面になるよう積極的に活動を行う、(2)日本考古学協会図書交換会に刊行を間に合わせる、(3)関連分野の投稿数を増やすべく具体的な検討を開始するというものであった。そのうち(1)については、今年度も引き続いて多彩な内容の論文や研究ノートに掲載することができた。ただし、結果として、地域的にみると北海道地方に関するものが多数を占めた。偶然ではあるが、当該地域における活発な研究活動の反映と肯定的に捉えたい。また、今年度から会誌の印刷・製本を大阪に営業所がある印刷会社へ変更した。印刷会社とは連絡を密に行うように努め、第9号の刊行を日本考古学協会図書交換会に間に合わせることができた。(3)については、会誌委員から周辺への働きかけを試みた結果、新たな会員の入会と論文投稿を受けることができた。

・会誌『旧石器研究』第9号(2013年5月刊行)の内容

第9号は、原著論文7、研究ノート1、シンポジウム報告1、書評2、会則・規定・会員名簿等からなる。総頁数は174頁である。今回、第10回講演・研究発表シンポジウムに関わる総説は掲載できなかったが、詳細なシンポジウム報告を掲載している。

第9号の構成は以下のとおりである。

資料1 日本旧石器学会 2012年度決算(単位:円)

収入				
費目	予算額	決算額	増減	摘要
1 会費収入				
会費収入	1,225,000	1,090,000	-135,000	08年度1名、09年度2名、10年度3名、11年度28名、12年度172名、13年度8名、14年度2名、15年度2名(合計218件)
2 その他の収入				
会誌頒布代金	320,000	272,200	-47,800	会誌8号47部、バックナンバー33部
シンポジウム予稿集頒布代金	200,000	139,200	-60,800	予稿集10号85部、バックナンバー23部
DB頒布代金	0	0	0	
雑収入	0	0	0	
前期繰越収支差額	2,041,495	2,041,495	0	
小計①	3,786,495	3,542,895	-243,600	
支出				
費目	予算額	決算額	増減	摘要
会議費・会場設営費	50,000	66,480	16,480	総会シンポジウム等会議費、考古学協会図書交換会卓代
旅費交通費	150,000	76,000	-74,000	総会シンポジウム発表者交通費補助、他
通信運搬費	300,000	148,442	-151,558	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、他
消耗品費	50,000	8,779	-41,221	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,360,000	927,148	-432,852	会誌、予稿集、ニュースレター3件、講演会チラシ
諸謝金	100,000	60,000	-40,000	講演会講師謝金、講演要旨翻訳謝金
委託費	63,000	63,000	0	HP管理料
次回APA日本大会経費積立	200,000	200,000	0	
研究グループ運営費補助	100,000	60,000	-40,000	2件(沖縄更新世人類研究グループ、南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ)
2013年度シンポジウム開催準備費	50,000	0	-50,000	
雑費	25,000	22,470	-2,530	雑費(振替、銀行手数料等)
予備費	1,338,495	0	-1,338,495	
小計②	3,786,495	1,632,319	-2,154,176	
次期繰越金小計①-小計②	0	1,910,576	1,910,576	

＜原著論文＞

- 1) 佐藤宏之・役重みゆき「北海道の後期旧石器時代における黒曜石産地の開発と黒曜石の流通」、2) 鹿又喜隆「北海道における初期細石刃石器群の機能研究—千歳市柏台1遺跡出土石器の使用痕分析—」、3) 有村 誠「西アジア新石器時代におけるPPN式対向剥離石刃製作技術の研究」、4) 中沢祐一「廃棄物形成からみた居住活動の組織化—北海道川西C遺跡En-a降下軽石層下位の居住面について—」、5) 森先一貴「東北地方後期旧石器社会の技術構造と居住形態」、6) 小杉 康「現代の日本列島域における後期旧石器文化の遺跡分布について—GISを用いた密度推定法による検証—」、7) 芝 康次郎「九州における後期旧石器時代の遺跡分布とその変化」

＜研究ノート＞

- 8) 出穂雅実・國木田 大・尾田識好・山原敏朗・北沢 実「北海道十勝平野の後期旧石器時代遺跡の地質編年：新たなAMS放射性炭素年代の追加とその意義」シンポジウム報告
9) 鹿又喜隆「日本旧石器学会 第10回講演・研究発表シンポジウム『旧石器時代遺跡・立地・分布研究の新展開』」

＜書評＞

- 10) 五十嵐ジャンヌ「J. クロット監修『世界の更新世美術』2012年」、
11) 山岡拓也「マイケル R. ウォータース著、熊井久雄・川辺孝幸監修、松田順一郎・高倉 純・出穂雅実・別所秀高・中沢祐一訳『ジオアーケオロジー—地学にもとづく考古学—』」

＜その他＞

- 12) 会則・規定、役員名簿、会員名簿、投稿規定・執筆要項

ニュースレター委員会 2012年度はニュースレター第21号、第22号、第23号の編集・発行を行った。

・第21号 2012年8月刊行

日本旧石器学会第10回大会の開催（報告）、2011年度委員会報告、2012年度活動計画、会則等の一部改正について、2012年度役員会、関連学会情報（第16回石器文化研究交流会山梨大会、2012年度岩宿フォーラム／シンポジウム、第38回九州旧石器文化研究会佐賀大会、『交替劇』国際シンポジウム、信州黒曜石フォーラム2012）、おしらせ（おわび、会費納入のお願い、住所変更のお願い、『旧石器研究』原稿募集について）

・第22号 2012年12月刊行

第5回アジア旧石器協会ロシア大会（報告）、日本旧石器学会シンボルマークの募集について、日本旧石器学会研究グループの募集について、日本旧石器学会普及講演会「ネアンデルタール人再発見の物語と日本の旧石器研究」開催報告、戸沢充則先生追悼シンポジウム「細石刃石器群研究へのアプローチ」開催報告、第16回石器文化研究交流会山梨大会開催報告、第29回中・四国旧石器文化談話会「愛媛県における旧石器文化の様相」開催報告、2012年度委員会中間報告、平成24年度「ひろしまの遺跡を語る」開催のお知らせ、2013年度研究発表・ポスターセッション発表の募集について、おしらせ（会費納入のお願い、住所変更のお願い、編集後記）

・第23号 2013年5月刊行

国際使用痕会議“Use-Wear 2012/Faro, Portugal”（報告）、日本旧石器学会研究グループ2012年度活動報告、2013年度総会・基調講演・一般研究発表・シンポジウム開催要項・プログラムのご案内、第38回九州旧石器文化研究会佐賀大会「九州におけるAT降灰前後の石器群—断絶か継続か、地蔵平遺跡の調査成果から—」開

資料2 日本旧石器学会 2012年度特別会計報告(単位:円)

収 入				
費 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
1 積立金収入				
積立金収入	200,000	200,000	0	2012年度 次回A P A 日本大会経費積立金
2 その他の収入				
	0	0	0	
前期繰越収支差額	0	0	0	
小計①	200,000	200,000	0	
支 出				
費 目	予算額	決算額	増 減	摘 要
次回A P A 日本大会経費	0	0	0	
その他の支出	0	0	0	
予備費	0	0	0	
小計②	0	0	0	
次期繰越金小計①－小計②	200,000	200,000	0	

催報告、岩宿フォーラム 2012/ シンポジウム (報告)、岩宿博物館開館 20 周年記念 / 東国文化周知事業シンポジウム「岩宿遺跡とその時代」開催報告、おしらせ (会費納入のお願い、事務局の移転について)

渉外委員会 渉外委員会では以下の活動を行った。

・2012 年 7 月 6 日～12 日に開催された APA ロシア・クラスノヤルスク大会への準備、連絡 (小野昭、佐藤宏之、加藤真二、長井謙治、役重みゆき、大谷薫の各会員が参加。詳細はニュースレター第 22 号掲載の長井報文を参照)。

・JPR A 奈良大会 (6 月 23・24 日開催) 開催に関わる諸調整 (実行委員会、奈文研との調整、タイムガパンベトフ氏対応など)

・APA ロシア・クラスノヤルスク大会中に開かれた APA 執行委員会

①会長の選出とその他役員の推薦・決定。APA 会長 (任期 2012～2014) : 小野昭が選出され、その後、副会長 : 佐藤宏之、執行委員・事務局長 : 阿子島香、執行委員 : 加藤真二を推薦・決定。

② APA 中国・銀川大会について (2013 年初夏 6 月に水洞溝発見 90 周年記念として寧夏回族自治区銀川市で開催。詳細を決定次第、各国へ通知する)。

③大会の毎年開催の是非、スヤングシンポジウムとの関わり等について (毎年開催の是非については継続審議。スヤングシンポは APA 中国・銀川大会では大会期間中に開催の予定で調整)。

・2013 年に開催される APA 中国・銀川大会に関する連絡調整 (ファースト・サーキュレーションの催促、翻訳)

研究企画委員会 2012 年度は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所を会場として日本旧石器学会第 10 回大会を開催した。その実施ならびに 2013 年度に東海大学湘南キャンパスを会場として実施される予定の第 11 回大会にむけた準備を行った。

データベース委員会 ① JPR A-DB の課題をまとめる。現状と課題をまとめた文書を作成し、役員に配布。② 検討課題に対して、インターネット上での公開を目標に詳細事項を決定する。具体的な課題として、a. データベース入力協力者の継続・交替・引継ぎ、b. データベース修正作業にあたっての総合的な管理、c. データベースの利用条件、d. データベース新項目の設定、e. バージョンアップの時期 (期間) などがある。6 県分の更新・修正データが届いている。③旧石器研究誌上に、「日本旧石器学会第 10 回講演・研究発表シンポジウム 旧石器時代遺跡・立地・分布研究の新展開」について、学会参加記をまとめる。このシンポジウムを踏まえた

上で、成果と課題を検討する。

入会審査委員会 入会審査委員会は、会則・運営細則にもとづき「論文・研究ノート・調査報告等を公表した者」という基準により、入会資格審査を行った。2012 年度

(2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日) の新入会員は以下の 7 名の方々である。(敬称略・都道府県別)。

津野田陽介 (栃木県)、有村 誠 (埼玉県)、五十嵐ジャンヌ (東京都)、役重みゆき (東京都)、高屋敷飛鳥 (神奈川県)、立神勇志 (大分県)、大堀皓平 (沖縄県)

広報委員会 HP を通じ、学会活動報告、関連情報、ニュースレターなどを広報した。また、日本の旧石器遺跡などの読めるコンテンツを追加した (現在 15 遺跡)。

旧石器時代の教科書掲載問題については、HP の子供向けの旧石器時代解説コンテンツ「旧石器時代の教科書」を HP にアップした。

普及講演会として、東日本会場では、2012 年 7 月 29 日 (日) 明治大学リパティタワーにおいて小野昭学会長による「ネアンデルタール人再発見の物語と日本の旧石器研究」を明治大学黒曜石研究センターと共催で開催した。

西日本会場では 2012 年 11 月 10 日 (土) に、黒曜石の原産地として有名な島根県隠岐の島町で「旧石器人が恋した隠岐の黒曜石」と題し、稲田孝司・及川穰・八幡浩二・丹羽野裕各氏による講演会とパネルディスカッションを島根県古代文化センター、隠岐ジオパーク戦略会議と共催で開催した。

2013 年度活動計画

総務委員会 経常的な会務に加え、以下の諸課題に取り組む。

(1) 会員メーリングリストに関すること

本ニュースレター 12 頁 (メーリングリストの構築及び運用に関するお知らせ) のとおり実施する。

工程 6 月 : 総会時に会員から「メールアドレス」収集、8 月 : ニュースレター第 24 号で会員に通知、10 月 : 「メールアドレス」収集期限、10 月末 : 運用開始。

(2) 研究グループ支援

「沖縄更新世人類研究グループ」(研究代表者 山崎真治氏) 第 3 年度の支援及び運営費の交付、「南アジアの旧石器時代遺跡研究グループ」(研究代表者 野口 淳氏) 第 2 年度の支援及び運営費の交付を実施する。

(3) その他

2014年度総会・大会の会場についての調整。

会計委員会 今年度は役員選挙があり、また新規事業として日本旧石器学会賞選考や会員メーリングリスト構築等が予定されており、これらに対応した会計の管理・運営をおこなってきたい。

・2013年度予算（資料3参照）

[収入] 会費収入は、前年度と同様、現在の会員数に年会費をかけて計上している。刊行物頒布収入は、ここ数年の頒布実績をもとに前年度より少なく計上している。

[支出] 各費目は、基本的に前年度の実績を参考として所要額を計上している。旅費交通費、通信運搬費、消耗品費は、前年度実績により減額したが、役員選挙、学会賞選考、メーリングリスト構築に関する想定費用も考慮して計上している。印刷製本費、諸謝金、研究グループ運営経費は、前年度実績に合わせ減額している。シンポジウム開催準備費は、前年度・前々年度の実績から0円としている。新たな費目として、学会シンボルマークの賞金について計上している。

会誌委員会 昨年度と同様、引き続き以下の目標を定め、会誌第10号が充実した内容となるよう責任ある編集体制の確保に努める。

(1) 学術的水準の高い論考が並ぶ、より「面白い」誌面になるよう積極的に活動を行う。

(2) 日本考古学協会図書交換会に刊行を間に合わせる。

(3) 関連分野の投稿数を増やすべく具体的な検討を開始する。

ニュースレター委員会 2013年度はニュースレター第24号、第25号、第26号の編集・発行を行う。

・第24号 2013年8月刊行予定

2013年度日本旧石器学会総会・研究発表・シンポジウムの開催（報告）、2012年度委員会報告、2013年度活動計画、おしらせ

・第25号 2013年12月刊行予定

第6回アジア旧石器協会中国大会（報告）、委員会活動中間報告、役員選挙について、関連学会情報、おしらせ

・第26号 2014年5月刊行予定

2014年度日本旧石器学会総会・研究発表・シンポジウム開催要項のご案内、研究グループ2013年度活動報告、関連学会情報、役員選挙結果について（報告）、おしらせ

渉外委員会 渉外委員会では以下の活動を予定している。

・APA 中国・銀川大会への連絡調整

日程：2013年6月26日－6月30日、開催地：銀川市ほか

資料3 日本旧石器学会 2013年度予算（単位：円）

収入				
費目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
1 会費収入				
会費収入	1,205,000	1,225,000	-20,000	会員241名×5,000円
2 その他の収入				
会誌頒布代金	300,000	320,000	-20,000	50部×4,000円=200,000円、バックナンバー及び委託販売分100,000円
シンポジウム予稿集頒布代金	156,000	200,000	-44,000	会員30部×1,200円=36,000円、一般40部×1,500円=60,000円、バックナンバー及び委託販売分60,000円
前期繰越収支差額	1,910,576	2,041,495	-130,919	
小計①	3,571,576	3,786,495	-214,919	
支出				
費目	予算額	前年度予算額	増減	摘要
会議費・会場設営費	50,000	50,000	0	総会シンポジウム・役員会等会議費・会場設営費、他
旅費交通費	100,000	150,000	-50,000	総会シンポジウム発表者交通費補助、国際会議旅費補助、他
通信運搬費	270,000	300,000	-30,000	会誌・ニュースレター送料、諸通知、役員間連絡、校正連絡、他
消耗品費	30,000	50,000	-20,000	事務用品、コピー、他
印刷製本費	1,150,000	1,360,000	-210,000	会誌、シンポジウム予稿集、ニュースレター3通、パンフレット、他
諸謝金	60,000	100,000	-40,000	総会シンポジウム基調講演講師謝金、公開講座講師謝金、他
委託費	63,000	63,000	0	HP管理・メーリングリスト構築運用委託
次回APA日本大会経費積立	200,000	200,000	0	
研究グループ運営経費	60,000	100,000	-40,000	
シンポジウム開催準備費	0	50,000	-50,000	
学会シンボルマーク賞金	30,000	0	30,000	
雑費	25,000	25,000	0	雑費（郵便振替、銀行振込手数料、他）
予備費	1,533,576	1,338,495	195,081	予備費、他
小計②	3,571,576	3,786,495	-214,919	
小計①－小計②	0	0	0	

テーマ：「東北アジア地域の後期旧石器時代における人類の拡散と相互交流」、参加予定者：小野昭（APA）、佐藤宏之（APA）、阿子島香（APA）、加藤真二（APA）、佐川正敏（一般）、海部陽介（一般）、西秋良宏（一般）、出穂雅実（一般）、島田和高（一般）、大谷薫（一般）、松藤和人（中国・韓国からの招待）

・APA 韓国大会への連絡調整

・APA 日本大会開催にむけて、準備のための手順検討と、具体案の叩き台作成

研究企画委員会 2013年度は、東海大学湘南キャンパスを会場として日本旧石器学会第11回大会を開催した。また2014年度に東京都小平市で予定されている第12回大会の準備を行う。同大会については、小平市教育委員会との共催もしくは後援による大会・シンポジウムを、下記の日程・会場で調整中である。

日時：2014年6月21日（土）・22日（日）、会場：小平市民文化会館（ルネこだいら）、総会・大会会場：中ホール（約400人規模）、ポスター会場：展示室

データベース委員会 ①データベース入力協力者の選定と依頼（遺跡数が少ない都道府県では、地方ブロックで担当者2名程に集約するべきと考えている）、②データベース加筆・修正箇所の取り纏め、③オンライン（学会HP）での公開にむけた計画・準備。

なお、データベースのオンライン化の点では、2011年に刊行されたものに誤記修正を加え、学会ホームページ上にアップすることが実行可能なところである。目標としては、2014年度総会の前後に、公開できるようにしたい。また、期限を定めて（例えば5年毎に）データを集約し、DBの公開に踏み込む方が良いのではないか。（各県・各地方を一定の水準でまとめ直すのは相当の労力であり、また協力者の取り組み方や、担当範囲によるデータ数量にも大きな違いがあるため。）現在、学会ホームページの運営に携わっている（有）アルケオリサーチによれば、①フリーアクセス、②会員のみアクセス（ID登録等）のいずれの方法でも、テクニカルな問題は無いとのことであった。さらに、動的基本データベースをWeb上で構築するなどの提案もあるが、実行には更に準備が必要となる。

入会審査委員会 引き続き新入会員の審査を行う。

広報委員会 日本旧石器学会や旧石器時代の周知・PR、教科書問題への取り組み、HPの更新や魅力あるコンテンツの作成を柱に、以下のとおり活動を行う。

①普及講座を開催し、日本旧石器学会や旧石器時代の周知・PRに努める。

予定 2013年9月14日 長野県にて開催 小野昭会長講演「石器の接合—さまざまな発見—」（9頁に詳細）

②HPでは、単に情報提供だけでなく、旧石器時代の理解を促進するための「日本列島の旧石器時代遺跡」などのコンテンツを追加する。

③教科書問題の対応として、HPに子供向けの旧石器時代解説コンテンツ「旧石器時代の教科書」を充実させる。またあわせて旧石器時代を紹介した解説パンフを印刷する。

④10周年記念として学会シンボルマーク制定。

最優秀賞 イラストレータ山浦基恵子様（長野県小諸市在住）に決定

⑤その他 共催事業

・フォーラム「神子柴遺跡とは何か」2013年7月7日、場所：長野県伊那市創造館、主催：伊那市創造館・上伊那考古学会、共催：明治大学黒耀石研究センター

・シンポジウム「日本列島における細石刃石器群の起源」2013年9月14・15日 場所：長野県浅間縄文ミュージアム、主催：浅間縄文ミュージアム、八ヶ岳旧石器研究グループ

日本旧石器学会賞について

2013年6月15日の総会で、「日本旧石器学会賞規定」を制定しました。「日本旧石器学会賞」は、旧石器研究に貢献し優れた業績をあげた会員等を表彰するもので、学会賞と奨励賞から構成されます。学会賞は会員の推薦から、また奨励賞は学会刊行物に発表した会員から、日本旧石器学会賞選考委員会が選考します。

第1回の授賞式は、2014年度の総会時を予定しています。

なお、日本旧石器学会賞選考委員は会長（小野昭）、副会長（麻柄一志）、研究企画委員長（諏訪間順）、総務委員長（伊藤健）及び会長が選考した会員（島田和高）で構成し、島田委員を委員長に選出しました。

日本旧石器学会賞規定

[目的]

第1条 本学会は日本旧石器学会会則第3条4に基づき、旧石器研究の発展を目的に旧石器研究に貢献し優れた業績をあげた会員等を表彰するため、本規定により必要な事項を定める。

[賞の種類]

第2条 本学会に、学会賞及び奨励賞を設ける。

第3条 学会賞は、旧石器研究の発展に貢献し優れた

業績をあげた会員に授与する。

第4条 奨励賞は、研究者の育成と研究の奨励を目的として、会誌「旧石器研究」等学会刊行物に優れた業績を発表した会員に授与する。なお、奨励賞の対象が研究グループ等の複数の発表者であることを妨げない。その場合、必ず発表者の代表者は会員であること。

[選考の方法]

第5条 学会賞及び奨励賞を選考するため、日本旧石器学会賞選考委員会を置く。日本旧石器学会賞選考委員会は、会長、副会長、研究企画委員長、総務委員長及び会長が選考した会員1名で構成し、日本旧石器学会賞選考委員の互選により日本旧石器学会賞選考委員長を置く。日本旧石器学会賞選考委員の任期は2年とし、日本旧石器学会役員の任期と同期とする。

第6条 会員は、日本旧石器学会賞選考委員会に対して学会賞受賞候補を推薦することができる。

第7条 日本旧石器学会賞選考委員会は、学会賞の受賞者を推薦のあった学会賞受賞候補の中から選考する。奨励賞の受賞者を、会誌「旧石器研究」等学会刊行物に発表した会員の中から選考する。

第8条 日本旧石器学会賞選考委員会は、選考理由書を添えて役員会に選考結果を報告する。役員会は、選考結果の報告を受けて受賞者を決定し総会に報告する。

[授賞式]

第9条 授賞式は、毎年1回総会にあわせて行う。学会賞受賞者へは賞状を、奨励賞受賞者には賞状及び副賞を授与する。

[付則]

1. 本規定は2013年6月15日から施行する。
2. 2013年度における役員の任期は2014年3月31日までであるため日本旧石器学会賞選考委員の任期も同日までとし、2014年度以降の日本旧石器学会賞選考委員の任期を役員と同じ2年とする。

学会賞の推薦について

「日本旧石器学会賞規定」に則り、学会賞受賞候補の推薦を募ります。旧石器研究の発展に貢献し優れた業績をあげた会員を推薦してください。

1. 推薦内容 学会賞受賞候補
2. 推薦期間 2013年9月15日(日)～2013年11月15日(金) (必着)
3. 推薦者の資格 日本旧石器学会員
4. 推薦方法

・学会賞受賞候補の氏名、学会賞受賞候補の推薦理由、推薦者の氏名・連絡先をご記入の上、郵送もしくは電子メールにより下記の事務局あてに送付して下さい。

5. 注意事項

- ・推薦は自薦・他薦を問いませんが、お一人につき一名を限度とします。
- ・学会賞受賞候補は、日本旧石器学会会員に限ります。推薦にあたって、学会賞受賞候補ご本人の承諾を得る必要はありません。
- ・推薦の書式は自由です。
- ・推薦理由は概ね100字から300字にまとめて下さい。

6. 応募先・照会先

日本旧石器学会事務局 (担当: 伊藤健・山岡拓也)
〒422-8529 静岡県静岡市駿河区大谷836 静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也研究室
電子メール jpra_2003@ay.em-net.ne.jp

会則の一部変更について

事務所の移転に伴い、当会会則の付則を改正した。改正部分は次のとおりである。(条文等の変更箇所には下線を付した)

日本旧石器学会会則及び運営細則

会則 (改正部分がないため省略)

付則 2. 本会の事務所は、静岡県静岡市駿河区大谷836 静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也研究室に置く。

運営細則 (改正部分がないため省略)

(2003年12月20日制定・2008年6月21日改定・2012年6月23日改定・2013年6月15日改定)

学会シンボルマーク決定!

学会創立10周年を記念し日本旧石器学会のシンボルマークが決定、6月15日の総会時に発表となりました。デザインは長野県小諸市在住のイラストレータ山浦基恵子さん。

球体は地球、そして木葉形はその中の日本列島、また上の木葉形は黒曜石の尖頭器、下の木葉形はサスカイトの国府型ナイフ形石器を表し、重なりは相互の融合を意味します。本ニュースレターのタイトル・デザインに組み込みましたのでご覧下さい。

山浦さんのさまざまなデザインのお仕事はコチラです。 <http://kiecoil.jp/index.html>

2013年度日本旧石器学会役員会

(任期 2013年4月1日～2014年3月31日)

会長：小野 昭、副会長：麻柄一志、総務：*伊藤 健、山岡拓也、西井幸雄（委嘱）、会計：*岩谷史記、麻柄一志、越知睦和（委嘱）、会誌：*絹川一徳、門脇誠二、藤田 尚、吉川耕太郎、岩瀬 彬（委嘱）、ニュースレター：*谷 和隆、沖 憲明、高倉 純、渉外：*阿子島香、加藤真二、絹川一徳、佐藤宏之（委嘱）、研究企画：*諏訪間順、鎌田洋昭、芝康次郎、高倉 純、藤田 尚、データベース：*鹿又喜隆、軽部達也、入会審査：*笹原芳郎、麻柄一志、広報：*堤 隆、丹羽野裕

会計監査：木崎康弘、宮田栄二

顧問：赤羽貞幸

選挙管理委員会：*栗原伸好、井関文明、鈴木次郎

（*は委員長）

アジア旧石器協会 会長：小野 昭、副会長：佐藤宏之、執行委員：阿子島香・加藤真二

日本旧石器学会普及講演会および 共催シンポジウムのお知らせ

小野昭会長による日本旧石器学会普及講演会、ならびに学会共催のシンポジウムを下記のとおり行います。ふるってご参加ください。

シンポジウム ”日本列島における細石刃石器群の起源”
— 細石刃発見 60 周年 —

1 日 時 2013 年 9 月 14 日（土）、9 月 15 日（日）
2 場 所 長野県北佐久郡御代田町 浅間縄文ミュージアム <http://w2.avis.ne.jp/~jomon>
3 参 加 ご自由にご参加ください（申込み不要）。
※懇親会参加のみ申込み Eメール jomon@mx2.avis.ne.jp

■ 9 月 14 日（土） 午前 10 時～午後 5 時

◎細石刃製作実演 午前 10 時～午後 12 時（実演 2 時間）
細石刃剥離のテクニック —直接打撃・間接打撃・押圧による細石刃剥離の実演— 大場正善（山形県埋蔵文化財センター）

◎普及講演会 午後 1 時 30 分～午後 2 時 30 分（講演 1 時間）

石器の接合一さまざまな発見— 小野昭（日本旧石器学会会長・明治大学黒耀石研究センター長）

◎研究発表 午後 2 時 30 分～午後 5 時（発表各 40 分）

1 ミトコンドリア DNA からみた日本列島へのヒトの移住 安達 登（山梨大学）

2 稜柱系細石刃石器群の生成プロセスの展望：荒川台型細石刃石器群を中心にして 佐藤宏之（東京大学大学院）

3 華北地域における角錐状細石核石器群—古本州島の細石刃石器群との関連について—加藤真二（奈良文化財研究所）

懇親会 明治屋旅館 午後 6：00～（会費 5000 円）

■ 9 月 15 日（日） 午前 9 時～午後 3 時（発表各 40 分）

4 日本列島における細石刃石器群出現期に関する諸問題 加藤学（新潟県埋蔵文化財調査事業団）

5 九州における初期細石刃石器群の形成過程 芝康次郎（奈良文化財研究所）

6 古本州島開発型細石刃技術の起源 須藤隆司（明治大学黒耀石研究センター）

7 北海道における押圧細石刃剥離技術の出現 高倉純（北海道大学埋蔵文化財調査室）

8 パネルディスカッション

■誌上発表

1 細石刃石器群と文化伝達、人口 仲田大人（青山学院大学）

2 中部・関東地域における細石刃石器群の形成過程 夏木大吾（東京大学大学院）

3 長崎県福井洞窟の発掘調査における細石刃石器群の層位的検出 柳田裕三（佐世保市教育委員会）

4 石器群の小形化・細石器化と細石刃石器群成立へのイノベーション 堤 隆（八ヶ岳旧石器研究グループ/明治大学黒耀石研究センター）

主催：八ヶ岳旧石器研究グループ 浅間縄文ミュージアム、共催：日本旧石器学会 明治大学黒耀石研究センター

お問合せ Eメール jomon@mx2.avis.ne.jp 堤隆まで

第 6 回アジア旧石器協会中国大会

第 6 回アジア旧石器協会（以下、APA と略称）大会は、2013 年 6 月 26 日から 30 日まで、中国寧夏回族自治区銀川市を中心に開催された。今回は 3 つの国際シンポジウムの合同開催として企画運営された。水洞溝遺跡発見 90 周年記念国際学術検討会、アジア旧石器協会第 6 回年次大会、第 18 回スヤング（垂楊介）とその隣人たち学術検討会である。さらに中国国内の先史時代を主とする博物館のシンポジウム（「史前博物館論壇」）がその中で開催された。

日程は、6 月 25 日（火）に会議登録、26 日（水）は水洞溝博物館にて開会式と基調報告、水洞溝遺跡巡検、野外レセプション。27 日（木）と 28 日（金）に国際会議。29 日（土）は周辺の史跡（賀蘭山岩画史跡公園、西夏王陵）と寧夏博物館へのエクスカージョン。30 日

(日)には内蒙古自治区にある薩拉烏蘇(サラウス)遺跡を訪ねた。そこから一部の参加者はオルドス市にある烏蘭木倫(ウランムルン)遺跡に向かい解散となった。日本からは、APA 招待者として4名(航空券は各自負担)のほか、5名が参加し、計9名の出席であった。阿子島香(APA 事務局長)、小野昭(APA 会長)、加藤真二(APA 執行委員)、佐藤宏之(APA 副会長)、および出徳雅実、海部陽介、熊井久雄、佐川正敏、島田和高の各氏である。スヤング会議の招待者も含まれている。また韓国からは、大谷薫氏(韓国先史文化研究院)の参加もあった。

受入れ側であるが、スポンサーとして「寧夏回族自治区文化庁」「中国科学院古脊椎動物与古人類研究所(IVPP)」「寧夏回族自治区旅遊局(観光局)」が並び、組織者は「寧夏文物考古研究所」「水洞溝遺址博物院」「寧夏博物館」となっている。プログラム上と新聞発表(「光明日報」6月25日の水洞溝会議特集記事)では、約10ヶ国から40名以上、全国からの研究者が約100名の参加である。IVPP から約20人の大勢の参加があった。会場は銀川市の世紀大飯店で、旧市街の中心東部にあたり、明代の楼閣である玉皇閣や清代の鼓楼などの歴史的建造物も近辺にあり、窓からは路地の市場も見える。

26日の開会式は、銀川市中心部から東南へ19km、靈武市臨河鎮に所在する水洞溝遺跡の博物館前庭で盛大に挙行された。乾燥気候の晴天の下、大きな広場に臨時の座席とひな壇、看板やアドパルーンが設置されての炎天下のセレモニーでは、APAの小野会長、IVPPの高星氏、スヤング関係者など主催者側、海外来賓、寧夏回族自治区などの挨拶が続いた。

続いて、水洞溝博物館の講堂で基調講演が行われた。呉新智氏は中国ホモサピエンスの多起源論を形質人類学の立場から総説した。Robin Dennell氏は、東北アジアの後期旧石器時代を理解することが、グローバルに見てなぜ、いかに重要なのかを8項目ほど力説した。従来ながく英仏語圏の知識が学界動向を支配してきたことへの再考も述べた。氏は水洞溝の2000年代の新発掘にも参画している。結論での Plan local, think global! (地域で調査し、そして地球的に考えよう)には同感させられた。Ofer Bar-Yosef氏は、ネアンデルタール人は中国へ到達したか?と題し、旧人が適応的に優れていたことと、より広範囲な分布を予察的に述べた。最後に高星氏が、2003年から2007年まで実施された、水洞溝遺跡の最新の発掘調査各地点の概要と新知見につ

いてまとめた。

遺跡博物館となりのレストランで一同昼食後、念願の水洞溝遺跡巡検があった。遺跡は流路に沿って侵食された断崖にあり、堆積層が累々と露出している。1923年にフランス人古生物学者 P. Teilhard de Chardin と E. Licent により80㎡が調査された第1地点は、その後1960年に中ソ合同調査、1980年に第4次調査がなされた場所でもある。見学路に沿って、第1、第2、第7の各地点で実際に詳しく説明を聞くことができた。垂直に削られて露出した堆積層はそのまま公開されている。

水洞溝遺跡博物館は2011年にオープンした現代的な展示で、面積4308㎡、出土石核の形をイメージした建築設計という。回廊式の展示で研究史、自然環境、遺跡の内容、出土石器を詳細に解説している。フランス人研究者の人形が印象的である。高さ16メートルの半球型の動くジオラマで3万年前の情景と、水辺の水洞溝人の生活を再現映像と音響で展示している。3Dの集団が出現し狩猟や石器製作を見せる。そして天変地異が襲い、豪雨と雷鳴、噴火の中で彼らは消え去る。見学者の立っている床が実際に鳴動、震動する大仕掛けである。夜7時「篝火晚宴」のパーベキューパーティー(ご当地的にヒツジの串焼き)。北方草原風のゆるやかな曲の歌い手で、いっそう雰囲気盛り上がる。このような場も大切な国際交流の機会と、浙江省の研究者と粗粒石材の使用痕分析法などを話す。

27日と28日には、3つの会議が複合して行われた。APAと水洞溝の合同会議は2日間を通して進められた。一方、史前博物館フォーラムは27日午前、スヤング会議は27日午後と28日午前に並行して進められた。4月に届いた Second Circular の時点で、参加者全員に発表要旨の提出を促し、実際にそれは111ページにおよぶ Abstract 集として刊行された。寄稿者は約83組になる。これだけでも研究の現状展望には貴重といえる。そし



写真1 水洞溝遺跡第1地点の見学

て開会直前の約 10 日前になって「貴兄に 15 分で発表してもらおうから準備を願う」旨のメールが届いた。口頭発表数は、約 40 件であったので（スヤングを除く）、かなり異例の展開であった。今回の APA は、直前まで詳細不明で不安を覚えていたが、始まってみたら見事な運営であった。登録受付で多くの文献が配布された。会議中配布を含め 13 冊あった。水洞溝に関するものが、2003 年からの第 5 次調査研究報告書など 4 冊、1928 年刊行の Boule、Breuil、Licent らによる古典的業績の中国語訳もあった。会議の要旨集、各口頭発表内容とともに、今回は字数制限が厳しく全体的紹介は困難なので、別の機会に譲る。

Paul Mellars 氏は、会議中活発に発言された。新人が細石器を携え南アジア海岸沿いに移動した年代と経路、北方での経路、東アジアへの移住など、人類の大きな拡散過程という視点は明瞭であった。（氏からは朝食の席で、2011 年 APA における日本側組織委員会の運営の見事さを話され恐縮した。改めて実行委員会諸賢に深謝したい）。しかし、会議中に中国などの研究者たちが展開した多地域進化説的な報告への対応に、すれ違いた状況を感じたのは筆者だけだろうか。遺伝子や形質といった考古学プロパー以外の学説に対して、今回の会議でも考古学的資料、具体的には石器の多様性の評価については、多くの議論が今後に残されているように思われた。石器群の内容を、人間集団の弁別やその進化段階と、どのように理論的に結びつけていくのかは、なお重大な問題であるように考えられた。

故ビンフォードのミドルレンジセオリー原則を持ち出すまでもなく、考古学的なメガパターンがどのように人間集団の動静と結びつけられるのか、実践と理論を合わせた追求が喫緊の課題である。筆者は、韓国の研究者たちの発表における後期旧石器時代への古い様相の残存、異なる様相の技術の共存、遺跡間の多様性などの報告に、同様な問題を考えた。今回の会議の大テーマは「東北アジア地域の後期旧石器時代における人類の拡散と相互交流」であったが、中期から後期への移行問題、ルヴァロワ技法と石刃技法の関係などをめぐっても、西から、北から、いつ頃、という Normative（規準的）な発想の再出現のような一部の論調に違和感を覚えた。考古学的なパターンへの意味付与という次元と、単一起源説と多地域進化説との関係という次元と、両者の混同があってはならないと感じた。

Steve Kuhn 氏は、「初期上部旧石器（IUP）再考」と題した報告で、用語の学史的な由来と、複数の地域で

IUP 石器技術が出現した可能性を論じた。現代人がどの年代にどこを移動したかに集中している議論の現状に対して、我々が学生の頃（1980 年代）は、集団移住やルートについての議論は人気がなかったと控えめに批判した。ちなみに Kuhn 氏はビンフォード門下の一人である。筆者は東北大学の最上川流域の調査での遺跡構造と使用痕を論じたが、日本列島への石刃の伝来ルートについて質問があった。伝播の経路よりも、長期的にいかになぜ石刃技法は適応的な優位性を有したのかを先に考えるべきであると答えた。

最後に Dennell 氏がまとめを行ない、国際誌での出版計画をアナウンスした。氏は中国の旧石器研究において若手の成長が顕著であり、新たな研究段階に入ったことを強調した。筆者も同様な印象を持った。所謂パーリンホウ（八〇后。改革開放以後に育った新世代）の研究者たちが、流暢な英語やフランス語を操り、最新の機器を駆使した発表をする姿に、逆に日本考古学の今後を考えてしまった。アメリカ考古学会でも、中国や韓国の若手の活躍に同様のことを思う。高星氏の閉会の挨拶で合同会議は幕を閉じた。

会議中の 27 日夜に APA 執行委員会が開催され、事務局長として出席し書記役を務めた。日本代表 5 名が参加した。議事内容は別途、小野 APA 会長から報告されるが、2014 年以降 APA 大会は隔年開催とすることで合意し、寧夏回族自治区特産のコク酒「寧夏紅」で、4ヶ国合意の乾杯をした。これは日本旧石器学会でも 2011 年以降に経過報告されていた事案である。筆者は APA 執行委員会には始めて参加したので、各国の国情について個人的認識を述べたい。ロシアは強力な国立研究所をバックにトップダウンの交流積極推進、中国は国家政策と関連するが予算や機会にその都度の方策を要し、韓国は学会ベースの運営と資金・組織の現実との関係が複雑、そして日本は民主的な個人会費ベースの運営



写真2 シャラオソゴール（薩拉烏蘇）遺跡にて 日中韓での交流

による限定、などの問題があげられよう。しかし2008年以降のAPA活動は、東アジアの学史に記されるべき重要な実績であると確信し、これを継承し発展させていくため微力を尽くしたいと思う。最後に、今大会の実現にあらゆる努力を惜しまれなかった、開催国の関係機関、組織委員会の皆様に、深甚の謝意を表し筆を擱きたい。(渉外委員長・アジア旧石器協会事務局長：阿子島香)

お知らせ

『旧石器研究』原稿募集について

会誌『旧石器研究』第10号の原稿を募集しています。投稿を希望される会員は、会誌第9号の末尾に掲載している投稿規定及び執筆要項に従って御投稿ください。編集の都合上、投稿希望者は執筆者氏名及び仮のタイトルを予め御連絡ください。なお、『旧石器研究』第10号の刊行は2014年5月を予定しています。投稿希望者は2013年11月末日までに御投稿ください。会員の皆様からの投稿をお待ちしています。

連絡・問い合わせ先：〒540-0006 大阪市中央区法円坂一丁目1-35 アネックスパル法円坂6階 (公財) 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所 絹川一徳気付
日本旧石器学会会誌委員会 E-mail: jpra.ecmember@gmail.com

会費納入のお願い

日本旧石器学会は、皆様の会費によって運営されているため、会費は原則前納とさせていただきます。会費未納の方々につきましては、速やかに所定の会費の支払い手続きをなされますようお願い申し上げます。年会費は5,000円で、振込先は、日本旧石器学会 郵便振替番号 00180-8-408055 です。全国の郵便局にて簡単に手続きいただけます。

住所変更のお願い

転居をされた方は必ず住所変更の手続きをお願いいたします。事務局までメール等でご連絡ください。

メーリングリストの構築及び運用に関するお知らせ

当学会は会員数約240名であり、会員へのニューズレターやその他の連絡のための郵送費が経費の大きな部分を占めるとともに、それに関わる事務作業量も多

いという状況にあります。こうした状況を踏まえ、郵送費の削減や会員への連絡の事務作業量の軽減のため、メーリングリストの導入についてこれまで検討してきました。2013年度中での運用開始を目指して、メーリングリストの構築と運用を計画し、以下の内容で2013年6月の総会で承認されました。

- ・HPで契約している(有)アルケリサーチから現在の契約内でメーリングリストのサービスも受けられるため、メーリングリストの構築・運用に関して(有)アルケリサーチに依頼する。
- ・2013年10月末をめぐりに、(有)アルケリサーチへメーリングリストに登録するデータを渡し、運用を開始する。
- ・今後、総務委員会経由で、入会時に新入会員のメールアドレスをメーリングリストに登録し、退会時には登録を解除するようにする。

なお、総会時には、個人情報等の扱いに関する意見が出されました。そのため、(有)アルケリサーチとの契約内容を確認し、必要があれば、今後、契約内容の修正も検討致します。

総会で承認されたことを受けて、6月15日・16日の総会・シンポジウムに参加していた会員諸氏にメーリングリスト登録希望のメールアドレスを用紙に記入して提出してもらいました。6月15日・16日に総会・シンポジウムに参加していなかった会員諸氏や、参加していたけれども登録希望のメールアドレスを用紙に書いて提出しなかった会員諸氏におかれましては、メーリングリストに登録を希望するメールアドレスを、2013年9月30日までに総務委員の山岡のメールアドレス (takuyayamaoka@yahoo.co.jp) まで、お知らせください。またハガキにご記入いただき、事務局住所へ郵送していただいても構いません。どうぞ、よろしくお願いいたします。(担当 総務委員会：山岡拓也)

日本旧石器学会ニューズレター 第24号

2013年8月30日発行

編集：日本旧石器学会ニューズレター委員会
谷 和隆・沖 憲明・高倉 純

発行：日本旧石器学会

事務局：〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836
静岡大学人文社会科学部社会学科山岡拓也研究室

E-mail jpra_2003@ay.em-net.ne.jp

HP <http://palaeolithic.jp/index.htm>